

書 評

講談社発行

小山 鐵夫著

資源植物学 (1984)

評者 並 河 清*

Kiyoshi Namikawa

本書は植物資源の性質を解説し、その探査と入手、並びにその再生産の維持と利用上留意すべき点を論じている。著者はニューヨーク植物園のアジア部長、主席研究官及びニューヨーク市立大学教授等として、資源植物学に造詣の深い専門家である。この書の構成は1、植物資源、2、資源植物のインベントリー研究、3、資源植物の保存、4、未開発および開発中有用植物の例からなり、副題は研究方法への手引きとなっている。

第1章では特に植物資源の貴重さ、重要性を説き、資源としての植物は、種子でふえてゆく再生産可能資源であって、鉱物資源のような有限資源とは大いに異なるとしている。しかし、絶滅してはどうにもならないとし、植物資源の本質と保護の必要性を述べている。コムギやサトウキビを例にして植物資源を説明し、植物資源と農業育種およびバイオテクノロジーの関係についても言及している。バイオテクノロジーは技術に過ぎず、いかに進歩しても根源をなす資源としての遺伝子がなければ、全くの無用の長物であるとしている。また技法の開発や分子生物学の研究が最高水準である日本が、その素材である資源植物自体に対して無関心であることを心配し、重ねて特に熱帯において、森林と共に多くの野性資源植物の遺伝子が急激に喪失し、また栽培植物の品種の喪失も多く、その理由と対策を訴えている。

第2章では資源植物のインベントリー研究（系統的調査研究）の重要性を説き、Vavilovの栽培植物起源の研究と植物地理を紹介し、種々の栽培植物の起源を教えている。未開発及び開発中の有用植物の探求について、研究方法を紹介し、植物の収集と同定、標本と標本館について記している。

第3章では資源植物の保存について、保存法、自然保護および植物の移住について記すと共に、世界の有

名な植物園とその活動を紹介している。また生きた植物の保存について述べ、ついで種子の保存、植物器官等の保存に言及している。

第4章では、資源植物学の主たる研究対象である、現実の未開発あるいは開発植物にどのようなものがあるかについて、世界で3,000種以上知られている有用植物の中から27の事例を挙げて説明している。

植物産業立国において勝敗を決するのは、「技術」ではなく「資源」であるとし、「植物資源ナショナリズム」という現象が広がりつつある現状に注意を喚起し、また栽培、野性植物にも多くの種や品種が消失しつつあることを憂いている。また日本の大学では農学や農業技術は世界最高の水準にあるが、理学部の中に資源植物学がないとし、資源植物学の重要性と植物のデータベースが作られることを訴えている。著者は中南米各地やアジアの植物資源について造詣が深く、植物学の立場から資源植物の重要性を説き、日本の現状に対して、書中各所で忠告を加えている。

農業機械学を専攻とする評者のように、植物学について疎い者については、読みにくい点が無かった訳ではないが、ひしひしと著者の資源植物に対する情熱と、訴えているところが、伝わって来る本である。1984年の刊行であり、書評には遅きに失するかもしれないが、警告に耳を貸した者として紹介する次第である。



* 京都大学農学部農業工学科教授

〒606 京都市左京区北白川